

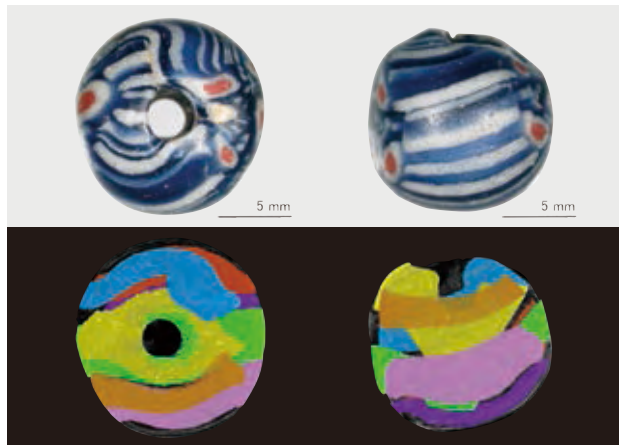
安造田東3号墳出土モザイク玉の 材質・構造調査

1990年、香川県満濃町（現・まんのう町）の安造田東3号墳から特殊なモザイク玉が出土しました。このようなモザイク玉は日本列島では類例がなく、発見当初から注目を集めました。分析技術上の問題により、化学分析はおこなわれていませんでした。それから約四半世紀が経ち、分析装置の発達により技術的な問題点が解決されたため、今回、マイクロフォーカスX線CTを用いた詳細な内部構造調査や、微小部を分析することのできる蛍光X線分析装置等を用いた化学分析を実施しました。

その結果、製作技法についてはおおよそ次のように推定できました。まず、赤色ガラス棒に白色ガラスを被せ、さらに紺色ガラスを被せます。そして、その周囲に白色の棒状ガラスを複数本付着させて一つのモザイク単位とします。これを7本束ねて一本のガラス棒とし、加熱しながら適当な太さになるまで引き伸ばして切断します。切断片を再度加熱して軟化させ、文様と垂直方向から芯棒を挿し込んで孔を作り出したと考えられます。

さらに、蛍光X線分析による材質調査の結果、本資料はササン朝ペルシアの領域で生産された可能性の高い植物灰タイプのソーダガラスであることがあきらかとなりました。本資料は、これまでも文様などを手掛かりに、海外の類例との比較から西域産の可能性が指摘されていましたが、今回の材質分析により、西方地域のガラスの中でもローマや中央アジアのガラスではなく、ササン朝ペルシアのガラスであることが実証的に示されました。

（埋蔵文化財センター 田村 朋美・大河内 隆之）



上：モザイク玉写真 下：X線CT画像解析

奈良・興福寺の明治維新

歴史研究室では東大寺の古文書を調査しています。そのなかに、明治維新の時の日記を見つけました。興福寺で実務を担当する承仕という役職にいた、中村宗円という人の日記です。明治維新で還俗して興福寺を離れ、その後、ご子孫が史料を東大寺に寄贈したために、いま東大寺に残っているのです。

慶応4年（明治元年、1868）の日記からいくつか拾ってみます。1月3日に京都出張を命じられますが、途中の伏見で、旧幕府側と維新側との軍勢がにらみ合っ物々しい空気。なんとか京都に着いたら、伏見で戦争になり、京都も大騒ぎに。鳥羽・伏見の戦いに偶然遭遇したのです。10日に奈良に還ってくると、維新側の十津川郷士が奈良を占領していました。2月7日には大和国鎮撫総督や諸藩の軍勢が奈良に到着。彼らの宿所を興福寺が提供するので、実務方は大忙し。そんな中、3月17日には、神仏混淆あいならずとのことで、興福寺上層部が対応に苦慮している様子。4月7日には、上層部は還俗するので、承仕たちも還俗するのかどうか、夕方までに返答せよとの命。「歎ケ敷事、古今未曾有之珍事也」とは思っても、事ここに至って「彼レ是申上候迄も無之次第二付」、還俗することに。名も、宗円ではなく男也と改名。それからは春日大社の新神司という立場に。しかし7月からは個人的に見込まれて、発足早々の奈良県に出仕、と、激変する情勢を記しています。またその中で冷静に仕事をこなしている点に、筆者の人格が偲ばれます。

明治維新期の奈良は、混乱期なので、公文書はあまり残っていません。この日記は、当事者の声を伝える貴重な記録です。（文化遺産部 吉川 聡）



鳥羽・伏見の戦いの時の日記（慶応4年1月3日）